

【特別報告】 No. 2 研究報告

コロナ禍における 看護系大学の遠隔授業から対面授業までの教育実態と教育の質

篠原幸恵, 上西加奈, 讃井真理, 河野保子,
中島紀子, 三並めぐる, 宮崎博子, 本田和男,
岡多枝子, 富安俊子, 高田律美, 藤本千里,
田中正子, 棚崎由紀子, 別宮直子, 羽藤典子,
大坪かなえ, 上西孝明, 青井みどり, 藤田碧,
眞鍋瑞穂, 山本千恵美, 村上早苗, 村岡由佳里,
永江真弓, 宇都宮匡児, 井野桜瑚

人間環境大学松山看護学部看護学科

(依頼原稿)

【要旨】

【目的】 コロナ禍で行われた看護系大学の遠隔授業の教育の実態を明らかにする。【方法】 看護系大学教員22名を対象に、準備期・遠隔授業期・ハイブリット授業期の3期に分けて、不安・満足度・学生の理解度・協力体制などを質問紙とインタビューで調査した。【結果】 対象者全員が授業への不安を感じており、機器操作と通信状況に関する不安であった。遠隔授業への満足度の高い者は、「遠隔授業の操作」、「学生との双方向でのやり取り」、「授業時間以外の学生の要望への対応」が十分に出来ていた。【考察】 遠隔授業期当初に双方向を多用せず、オンデマンドによる講義から始めたことが不安低減と満足に繋がったと考えられた。教職員間の支援体制がトラブルの少ない遠隔授業の実施に繋がり、そのことが、何とかできるという感覚をもたらしている。一方で、学生状況の把握方法と、伝える方法の獲得は、困惑感と困難さを感じていると考えられた。

キーワード：遠隔授業, コロナ禍, 看護教員, 看護学生, 教育の質

I. 緒言

2019年秋、中国の武漢市に端を発した新型コロナウイルス(COVID-19)感染は世界中に拡散した。2020年4月7日、日本政府は新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく『緊急事態宣言』を発出し、嚴重な感染拡大防止対策を講じた。これらを受けてわが国の大学は文部科学省からの各種通知により、Information and Communication Technology(以下、ICT略)を活用した遠隔授業等を開始した。文部科学省は新型コロナウイルス対策としての大学等における遠隔授業の取り組みとして、遠隔授業等の実施に係る留意点、実習等の授業の弾力的な取り扱い、個々の学生の状況に応じた学修機会の確保等を通知し(令和2年5月1日)、さらには、国公立及び私立大学における新型コロナウイルス感染症対策の好事例を作成し、発信しており、現在では、全国の大学の9割が遠隔授業を実施しているという(文部科学省, 2020)。

遠隔授業は、2004年から、パソコンやコンピューター・ネットワーク、インターネット通信を利用したe-learning

による高等教育として推進され注目されている。看護系大学においては、「国際看護学」を中心とした遠隔授業の実施報告(宮越ら, 2012・森兼, 2015)があるのみで、ほとんど遠隔授業への関心が持たれていなかったが、徐々にICTを活用した授業展開に関する教育研究が広がりを見せている。

人間環境大学松山看護学部(以後、本学部)は、開学部4年目を迎えようとしていた時期において、新型コロナウイルス感染拡大に対峙した教育を行わなければならない状況になっていた。本学部では2020年3月から遠隔授業実施の可否の検討を始め、本学部のキャンパス及び学生の通信環境を個々に調査し、4月22日から学生の「教育の質を確保する」という方針の下、教職員が協力して遠隔授業開始に向けた準備を開始した。まず、4月27日から遠隔授業開始までの間、大学本部主催の遠隔授業に関する全教員への一斉研修をおこなった。その後、本学部は、5月7日に全学年に向けてMicrosoft Teamsを利用し、デモンストレーションを兼ねた前期オリエンテーションを実施した。そして、5月18日からMicrosoft Teamsを使用し、学生は自宅

で講義を受ける同時双方向型遠隔授業（以下、遠隔授業）を開始した。遠隔授業において通信環境によるトラブルを回避するため、教員の講義時には学生側のカメラとマイクはオフにするように指示した。また質疑応答や追加講義の時にはチャット及び手を挙げる機能を活用し、学生との交流を確保した。さらに講義終了後にも質問等には、Gメールによりコミュニケーションを図った。6月1日からは、クラスを2つに分けて、片方は対面授業を、片方には自宅における配信授業をリアルタイムで行い、各週に入れ替えるという対面授業と遠隔授業の同時並行型授業（以下、ハイブリッド授業）を実施した。ハイブリッド授業において対面授業の学生の反応と同時に、遠隔授業を受けている学生の反応をチャットと手を挙げる機能を活用し確認した。そして、すべての授業は録画し、オンデマンドでも授業が視聴できるようにした。また、「学生の出席確認」は、Microsoft Formsを使用し、講義終了後に即、提出するようにした。6月22日からは対面授業のみを開始して現在に至っている。

コロナ禍における急激な授業形態の変化において、もっとも大きな課題は、教育の質をいかに担保するかであろう。医学教育では、新型コロナウイルス感染拡大に伴った遠隔授業への切り替えについて、すでにその実践が学会等で報告されている（服部ら、2020・西屋ら、2020）が、看護系大学のコロナ禍における実践報告はほとんどみられていない。

今回、本学部で実践した遠隔授業への取り組みを通して、本学部の遠隔授業がどのような状況にあったのか、遠隔授業が学生への教育の質を確保したものであったのかを明らかにすることを試みた。

II. 研究目的

本研究は看護系大学における遠隔授業の実態を明らかにし、学生への教育の質を確保したものであったのかを分析する。またこのことを踏まえて、遠隔授業を利用した新たな教育方法の確立に繋がる授業のあり方を検討する。

III. 研究方法

1. 対象と調査方法

調査対象は、本学部の教員25名で、アンケートに参加できなかった者3名を除き、22名とした。その対象者全員に無記名式質問紙と個別インタビューを実施し、全員から回答を得た。

なお本学部では、学生に例年実施している前期授業アンケートがあり、その結果を用い、教員による学生への授業評価を関連させて、遠隔授業の教育の質評価が如何なるも

のであったのかを分析する。

2. 調査期間

調査の実施は、1)遠隔授業準備期間（以後、準備期間）、2)2週間の遠隔授業、3)3週間のハイブリッド授業の取り組みについて、対面授業移行直後に振り返り調査を行った。調査期間は、令和2年7月13日～7月31日である。

3. 調査内容

1) 準備期間に関する調査内容

下記の(1)～(6)の項目の理解度及び不安、教員間の支援体制について、「十分に理解できた」から「理解できなかった」までの4件法を用いて回答を求めた。また、遠隔授業を実施することへの不安や教員間の支援体制については自由記載で回答を求めた。

- (1) 大学本部主催の全教員を対象とした「一斉研修」
- (2) 「Microsoft Teamsの教材」
- (3) 「本学部独自に作成した操作手順」
- (4) 「本学部独自に作成したチェックリスト」
- (5) 遠隔授業を実施することへの不安
- (6) 教員間の支援体制

2) 遠隔授業及びハイブリッド授業に関する調査内容

下記の(1)～(7)の項目について、「とてもスムーズにできた」から「スムーズにできなかった」までの4件法を用いて回答を求めた。(8)については、全体的満足度を4件法で回答を求めた。

- (1) 「遠隔授業の操作」
- (2) 「学生との双方向でのやり取り」
- (3) 「学習の目標の明示」
- (4) 「講義内容を学生に十分に伝えること」
- (5) 「学生への理解度の把握」
- (6) 「学生への出席確認」
- (7) 「授業時間以外の学生の要望への対応」
- (8) 「教育方法への全体的満足度」

3) 5週間の遠隔授業への取り組みに関する調査内容

下記の(1)、(2)の項目について、自由記載あるいは4件法で回答を求めた。

- (1) 対面授業と遠隔授業との比較
- (2) 5週間の遠隔授業への取り組みに対する全体的満足度

4. 統計解析

統計処理ソフトはExcel 2016を用いた（有意水準は5%以下）。「遠隔授業」と「ハイブリッド授業」の2群において、8つの調査項目で「とてもスムーズにできた」、「かなりスムーズにできた」をスムーズにできた群、「あまりスムーズにできなかった」、「スムーズにできなかった」をスムーズにできなかった群の2群に分けFisherの正確検定を行った。また、5週間の遠隔授業への取り組みに対する全体的満足度を「かなり満足している」、「少し満足してい

る」を高群, 「あまり満足していない」, 「満足していない」を低群の2群とし, (1) ~ (7) の調査項目の回答内容において, スムーズにできた群, スムーズにできなかった群の2群に分けFisherの正確検定を行った。

また, 6月下旬に実施された学生への前期授業アンケート項目のうち, 「教員は学生の理解度に合わせ, シラバスの記載内容を基本として授業を行っているか(以後, シラバスとの一致度)」, 「これまでの講義内容は理解できたか(以後, 講義内容の理解度)」, 「この授業科目の運用について全体的に満足しているか(以後, 全体的満足度)」の3項目を学生の授業評価として分析の対象とした。この3項目を選択した理由は, 授業全体の質を端的に評価できる項目であると考えたためである。さらに, これらの平均値を前年度の平均値と比較した。

自由記載, 個別インタビューの内容は, 得られたデータを意味ある内容ごとの一文にし, 各時期でまとめ, 分析した。

5. 倫理的配慮

調査対象者(以下, 教員)に, 文章と口頭で, 研究の目的・方法・情報の守秘義務・学会等での公表について・研究への参加は任意であり, 拒否できることを説明した。また, 得られたデータはID化し, 番号で管理し, 個人が特定されないように配慮した。そして, 研究者のみがデータを取り扱い, 鍵のかかる保管庫に保管し, 管理した。

IV. 結果

本研究は, 看護系大学における遠隔授業の実態を明らかにし, 学生への教育の質を確保したものであったのかを分析することを目的としている。以下に, 1. 準備期間について, 2. 遠隔授業とハイブリッド授業の評価の相違について, 3. 遠隔授業及びハイブリッド授業を実施しての反応について, 4. 遠隔授業と対面授業との比較について, 5. 学生による前期授業評価の結果について述べる。

なお, 自由記載に関しては, 紙面上の都合により, 掲載していない。

1. 準備期間について

大学本部主催の「一斉研修」には, 教員全員が参加し, 理解できた者14名(63.6%), 理解できなかった者8名(36.4%)であった。また, 「本学部独自に作成した操作手順」を理解できた者が21名(95.5%), 理解できなかった者1名(4.5%)であった。そして, 「本学部独自に作成したチェックリスト」においては, 教員全員(100%)が理解できていた。

遠隔授業期間内において, 遠隔授業を実施することへの不安を, 全員(100%)が持っていた。その不安のほとんどが, 機器操作・通信状況に対するものへの不安であった。そのような不安を持ちながらも, 領域・科目ごとに教員間において協力した者が20名(90.9%), 協力しなかった者2名(9.1%)であった。さらに, 領域外の協力体制を活用した者が13名(59.1%), 活用しなかった者9名(40.9%)であった。

2. 遠隔授業とハイブリッド授業の評価の相違について

遠隔授業とハイブリッド授業別に調査項目ごとの回答結果を表1に示した。「遠隔授業の操作」については, 遠隔授業はスムーズにできた者が20名(90.9%), スムーズにできなかった者2名(9.1%)に比べて, ハイブリッド授業ではスムーズにできた者17名(77.3%), スムーズにできなかった者5名(22.7%)であった($p=.37$)。また「学生への理解度の把握」は, 遠隔授業はスムーズにできた者が18名(81.8%), スムーズにできなかった者4名(18.2%)に対して, ハイブリッド授業ではスムーズにできた者が20名(90.9%), スムーズにできなかった者2名(9.1%)であった($p=.42$)。学生への理解度に対する把握についての自由記述からも, Microsoft FormsやG-mailなどを活用・工夫して授業を展開しながら, 教員は学生の状況把握に努めていた。

「学生との双方向でのやり取り」と「講義内容を学生に

表1 遠隔授業とハイブリッド授業における各調査項目の回答人数結果 (N=22)

	遠隔授業		ハイブリッド授業		P
	スムーズにできた	スムーズにできなかった	スムーズにできた	スムーズにできなかった	
(1) 遠隔授業の操作	20 (90.9%)	2 (9.1%)	17 (77.3%)	5 (22.7%)	.37
(2) 学生との双方向でのやり取り	14 (66.7%)	7 (31.8%)	14 (63.6%)	8 (36.4%)	.45
(3) 学習の目標の明示	22 (100%)	0 (0.0%)	21 (100%)	0 (0.0%)	.50
(4) 講義内容を学生に十分に伝える	19 (86.4%)	3 (13.6%)	19 (86.4%)	3 (13.6%)	.50
(5) 学生への理解度の把握	18 (81.8%)	4 (18.2%)	20 (90.9%)	2 (9.1%)	.42
(6) 学生への出席の確認	22 (100%)	0 (0.0%)	20 (90.9%)	2 (9.1%)	.47
(7) 授業時間以外の学生の要望への対応	18 (81.8%)	4 (18.2%)	16 (76.2%)	5 (22.7%)	.42
(8) 教育方法の全体的満足度	17 (77.3%)	5 (22.7%)	13 (61.9%)	8 (36.4%)	.25

十分に伝えること」は、両時期で変化を認めなかった。「学生への出席確認」は、遠隔授業においてスムーズにできた者が22名(100%)であり、ハイブリッド授業と変化はなかった(p=.47)。「授業時間以外の学生の要望への対応」は、スムーズにできた者が18名(81.8%)、スムーズにできなかった者4名(18.2%)で、ハイブリッド授業との間で違いはなかった(p=.42)。また、学生から教員に対する授業時間以外の要望として、遠隔授業においては画面の設定や音量など、機器操作に関連する内容が多く見られたのに対して、ハイブリッド授業においては自宅で授業を受けている学生から授業の進行が早いという意見が見られた。

遠隔授業における「教育方法の全体的満足度」は、満足できた者が17名(77.3%)、満足できなかった者5名(22.7%)で、ハイブリッド授業との違いは認めなかった(p=.25)。満足度に関する自由記述として、大きなトラブルがなかったこと、事前の研修を受けスキルアップしたこと、協力体制による工夫があったことが記述されており、ある一定の成果はあったものの、さらなるスキルアップが必要であることが記載されていた。

3. 遠隔授業及びハイブリッド授業を実施しての反応について

学生の顔が見えない遠隔授業に対する反応は、遠隔授業では、学生の反応が十分に得られないことによる困惑感が記載されていた。一方ハイブリッド授業は、対面授業により学生の反応は感じられるものの、その反応は履修者の半数に限られ、遠隔授業の出席学生への対応をも迫られることによる困難感が記載されていた。また、それぞれの自由記述において、遠隔授業は何とか無事に配信でき、学生の出席確認が取れたことへの安堵感の記載があり、ハイブリッド授業では、対面授業と遠隔授業とを両立させること

への緊張感に加え、通常とは異なる多様な業務内容が生じていることの課題が記述されていた。

4. 遠隔授業と対面授業との比較について

5週間の遠隔授業への取り組みに関する調査において、遠隔授業と対面授業のそれぞれの良否、利点、欠点などについて、自由記載の回答を求めたところ、対面授業では、学生の反応に合わせて授業を行うことの意義が記載され、他方、感染拡大リスクへの配慮が記載されていた。遠隔授業では、学生の受講状況への不安と、資料印刷などの学生負担の増大への危惧が記載される一方で、通常行っていた講義後の評価が容易に行えるメリットへの気づきが記載されていた。

そして、今回の遠隔授業の取り組みに対する全体的満足度は、かなり満足できた者が7名(31.8%)、少し満足できた者が10名(45.5%)、あまり満足できなかった者5名(22.7%)であった。5週間の遠隔授業への取り組みの全体的満足度を、「かなり満足している」、「少し満足している」を高群、「あまり満足していない」、「満足していない」を低群とし、(1)～(7)の調査項目の回答内容とにおいて、スムーズにできた群、スムーズにできなかった群の2群に区分し、比較検討した。この2群比較を遠隔授業とハイブリッド授業の期間に分け、Fisherの正確検定を行った結果、遠隔授業では、「遠隔授業の操作」(p=.003)において、遠隔授業の操作が全体的満足度の高低に影響していた。それ以外の項目では、全体的満足度の高低において影響はなかった。しかし、ハイブリッド授業では、「遠隔授業の操作」(p=.042)、「学生との双方向でのやり取り」(p=.0005)、「授業時間以外の学生の要望への対応」(p=.048)において、スムーズにできたことが全体満足度の高低に、有意に影響していた(表2)。

表2 5週間の遠隔授業への取り組みに対する全体的満足度の高群と低群における各調査項目の回答人数結果

	遠隔授業 (N=22)				p	ハイブリッド授業 (N=21)				p
	高群		低群			高群		低群		
	スムーズにできた	スムーズにできなかった	スムーズにできた	スムーズにできなかった		スムーズにできた	スムーズにできなかった	スムーズにできた	スムーズにできなかった	
(1) 遠隔授業の操作	16 (72.7%)	1 (4.5%)	4 (18.2%)	1 (4.5%)	<.01	13 (59.1%)	0 (0.0%)	5 (23.8%)	3 (14.3%)	<.05
(2) 学生との双方向でのやり取り	13 (59.1%)	4 (18.2%)	4 (18.2%)	1 (4.5%)	1.0	12 (54.5%)	1 (4.8%)	1 (4.8%)	7 (33.3%)	<.01
(3) 学習の目標の明示	17 (77.3%)	0 (0.0%)	5 (22.7%)	0 (0.0%)	1.0	13 (61.9%)	0 (0.0%)	8 (38.1%)	0 (0.0%)	1.0
(4) 講義内容を学生に十分に伝える	16 (72.7%)	1 (4.5%)	3 (13.6%)	2 (9.1%)	.12	13 (61.9%)	0 (0.0%)	6 (28.6%)	2 (9.5%)	1.0
(5) 学生への理解度の把握	15 (68.2%)	2 (9.1%)	3 (13.6%)	2 (9.1%)	.21	13 (61.9%)	0 (0.0%)	7 (33.3%)	1 (4.8%)	.38
(6) 学生への出席確認	16 (72.7%)	1 (4.5%)	5 (22.7%)	0 (0.0%)	1.0	12 (57.1%)	0 (0.0%)	7 (33.3%)	1 (4.8%)	.38
(7) 授業時間以外の学生の要望への対応	15 (68.2%)	2 (9.1%)	3 (13.6%)	2 (9.1%)	.21	10 (47.6%)	1 (4.8%)	4 (19.0%)	4 (19.0%)	<.05

5. 学生による前期授業評価の結果

調査対象者の教員が担当する科目において、前期授業アンケート項目の「シラバスとの一致度」、「講義内容の理解度」、「全体的満足度について」、平均値を算出した。遠隔授業実施時の本学部の「シラバスとの一致度」の平均は89.0点、「講義内容の理解度」の平均は82.2点、「全体的満足度について」の平均は85.0点であった。通常授業の前年度では、「シラバスとの一致度」の平均は89.2点、「講義内容の理解度」の平均は79.7点、「全体的満足度について」の平均は81.6点であり、「シラバスとの一致度」は変化なく、「講義内容の理解度」及び「全体的満足度について」においては、遠隔授業の方が、点数が高かった。

V. 考察

本学部は、コロナ禍における学生への感染を阻止するために遠隔授業及びハイブリッド授業を試みた。本学部の感染対策の取り組みは、3密（密閉、密集、密接）を避け、感染リスクに配慮した教育環境の整備を行った。その教育環境整備の具体は、座席間隔を空けた座席配置、学年の学生数を考量した講義室の使用、教卓の前に透明シートの設置、各エレベーター前のフロアと講義室にアルコール手指消毒剤の設置、各講義室にアルコール除菌シートを設置した。また、入口のドアと窓の開放による換気、授業前後の机と椅子の消毒の実施、ソーシャルディスタンスを配慮した演習の実施、教職員及び学生のマスクの着用の徹底、必要時、教員がフェイスシールドの着用、エレベーター利用制限、毎日の健康管理を実施し、週1回健康管理表の提出、授業開始前に、学生の健康確認を実施したことであり、本学部の感染対策は、十分にできていたと判断できる。

このような感染対策に取り組みながら、遠隔授業及びハイブリッド授業を実施し、各時期における教員の反応について、以下考察する。

1. 準備期間中の反応について

本研究の対象者である教員は、全員が遠隔授業を実施することへの不安を感じていた。不安の内容は、機器操作・通信状況に対する不安であった。しかし、操作に関する困惑はあったものの、自由記載からは通信状況による大きなトラブルはなく、協力を得ながらではあるが、意外に何とか「遠隔授業は実施できる」という感覚を持っていたと推察できた。これは、本学部キャンパス及び学生の通信環境を事前に考慮し、できる限りの対策を予測し、改善したことによるものと考えられる。さらに、教員のほとんどが、大学本部主催の全教員を対象とした「一斉研修」と本学部独自の勉強会に参加していたこと、「本学部独自に作成した操作手順」を使用し、オンデマンドによる講義内容の事前吹込みを実施したこと、「本学部独自に作成したチェックリ

スト」を活用し、オンタイムによる同時双方向型の遠隔授業を実施したことが、「遠隔授業は実施できる」というプラス志向になったのかもしれない。さらに、教職員の遠隔授業実施の支援体制が構築できていたことがトラブルの少ない遠隔授業の実施につながっていたと推察できる。また、そのことが、教員の不安の解消につながり、何とか「遠隔授業は実施できる」という感覚をもったものと考えられる。

2. 遠隔授業及びハイブリッド授業期間中の反応について

教員は、「遠隔授業の操作」、「学習目標の明示」、「学生への出席確認」に対して、遠隔授業の当初からスムーズにできたと評価していた。この評価は、操作の事前準備を丁寧に行い、各教員が一人ではなく、担当領域を超えた支援体制を整えられていた結果と考える。一方で「学生との双方向でのやり取り」は、比較的スムーズにできていないと感じていた。そして、ハイブリッド授業の期間を経ても同様の状況であった。このことは、今までに経験したことのないICTの活用及び学生の教育状況を把握しなければならないことへの困惑と戸惑いの結果だと考えられる。あるいは、遠隔授業における学生の反応の情報収集スキルの乏しさの結果でもあり、さらにハイブリッド授業は対面授業と遠隔授業の両出席者に対して、同じように教育内容を伝えることの困難さと困惑感によるものと考えられる。遠隔授業が今後もあるとするならば、ハイブリッド授業よりもオンタイムによる同時双方向型を実施することの方が、教員の心身の負担が軽減されるのではなかろうか。

また、「学生への理解度の把握」については、遠隔授業期間よりハイブリッド授業期間のほうがスムーズにできるようになっていた。さらに5週間の遠隔授業の取り組みへの全体的満足度の高低は、遠隔授業よりもハイブリッド授業の方が「学生との双方向でのやり取り」、「授業時間以外の学生の要望への対応」において、スムーズにできたかどうかに影響していた。これは、全体的満足度が高い教員が、遠隔授業期間の機器の操作に関するスキルを教員自身が習得し、かつ、同時に様々な工夫を繰り返しながらハイブリッド授業に移行することができたためと考える。しかし、ハイブリッド授業においては、Microsoft Teamsの操作や遠隔授業を受けている学生への対応に加え、対面授業の学生とのやり取りも同時に行う多重操作となる。この多重操作は、教員の遠隔授業に対する負担を感じさせる結果に繋がっていた。しかし、機器の操作方法の習得は、様々な教授法の多様化につながる。今後、急速に看護の大学教育にも遠隔授業等の手法が開発・発展していくことが予想される。そのため、コロナ禍に限らず、遠隔授業やICT、Artificial Intelligence (AI) の機器の操作方法を習得していくことは、多様性のある教育方法を獲得できるであろう。

3. 遠隔授業及びハイブリッド授業の実施における教育の質保証について

例年実施している教員に対する学生の前期授業アンケートについて、今回は遠隔授業中に前期授業評価を行った。前年度の前期授業アンケートと比較すると、約8割の学生の反応は、教員はシラバスの記載内容を基本として、学生の理解度に合わせて授業を行っており、講義内容も理解できる内容であったと回答していた。また、授業科目の運用についても全体的に満足していた。さらにこの学生の前期授業アンケートの結果を前年度と比較すると、平均値の得点が高かった。このことは、教員自身が遠隔授業という未知の操作に真剣に取り組んでいる状況に対して、学生自身が好意的に教員及び授業そのものを評価しているのではないかと推察できた。また、教員自身も授業というものに対して、限られた時間の中において教育内容に真摯に取り組んでいたことが予測できた。さらに、遠隔授業のデメリットである学生のニーズをどのように救い上げるかということも教員は時間外を利用し、Gメール等で丁寧に対応した結果であると考えられる。

以上のことから、今回の調査結果では、遠隔授業における学生への教育の質を、ある程度は確保できたと考えられる。現在、本学部は、対面授業を行っている。今後、新型コロナウイルス感染が拡大すると、再度、遠隔授業へと移行が余儀なくされる。その時、教員1名で行う教育の質を確保した遠隔授業の実施には限界があるため、今回の取り組みの過程で行ったように、各領域で協力しながら、本学部の全教職員が、遠隔授業を実施していくとともに、各人の知識とスキルを学びあって、発展的に取り組むことが重要である。そして、そのためには、遠隔授業の教育の質を確保するための研究を積み重ねていくことが課題である。

VI. 結論

本研究は、教員の遠隔授業への取り組みを通して、本学

部の遠隔授業がどのような状況にあったのか、遠隔授業が学生への教育の質を確保したものであったのかを明らかにすることを目的とした。教員全員が遠隔授業を実施することへの不安を感じながらも、実際には、大きなトラブルがなく実施できていた。また、5週間の遠隔授業への取り組みへの全体的満足度の高い者は、低い者と比べて、「遠隔授業の操作」、「学生との双方向でのやり取り」、「授業時間以外の学生の要望への対応」がスムーズにできていたことが示唆された。さらに、約8割の学生は、教員は学生の理解度に合わせてシラバスの記載内容を基本としながら授業を行っていたと評価し、授業内容の理解度や授業科目の運用についても全体的に満足していた。これらのことから、本調査では、遠隔授業における学生への教育の質は、ある程度、確保できていると考えられた。

文 献

- 服部稔, 蓮沼直子, 安達伸生, 栗井和夫 (2020). 広島大学医学部医学科における同時双方向型遠隔授業の試み, 医学教育, 51 (3), 240-241.
- 西屋克己, 唐牛祐輔, 野村昌作, 友田幸一 (2020). コロナ渦における関西医科大学医学部のICTを活用しや教育戦略, 医学教育, 51 (3), 238-239.
- 宮越幸代, 太田克矢, 森下孟 (2012). 2010年度に配信した遠隔授業「国際看護学」の実践報告—授業システム運用と授業運営に対する考察—, 長野県看護大学紀要, 14, 99-111.
- 森兼眞理 (2015). 遠隔授業による国際看護・国際保健教育への試み—JICAカンボジア保健プロジェクトの協力を得て—, 奈良看護大学紀要, 11, 92-96.
- 文部科学省 (2020.9.2). 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について, https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html

【付記】 本研究において利益相反は存在しない

The quality of education when shifted from distance learning to face-to-face classes as conducted at a nursing university during COVID-19. Journal of Nursing Science in Human Life, 3: 7-12 (2020). Shinohara Sachie, Kaminishi Kana, Sanai Mari, Kawano Yasuko, Nakajima Noriko, Minami Meguru, Miyazaki Hiroko, Honda Kazuo, Oka Taeko, Tomiyasu Toshiko, Takata Norimi, Fujimoto Chisato, Tanaka Masako, Tanasaki Yukiko, Bekku Naoko, Hato Noriko, Otsubo Kanae, Kaminishi Takaaki, Aoi Midori, Fujita Midori, Manabe Mizuho, Yamamoto Chiemi, Murakami Sanae, Muraoka Yukari, Nagae Mayumi, Utsunomiya Kyouji, Ino Sakurako (Faculty of Nursing Sciences at Matsuyama, University of Human Environments).

Abstract: 【Objective】 The purpose of this study was to establish, based on the actual conditions, whether a distance learning class at a nursing university carried out during the emergency evacuation imposed by a declaration of emergency due to the spread of COVID-19 infections ensured the quality of the education. 【Methods】 Twenty-two faculty members were surveyed using questionnaires and interviews regarding anxiety, satisfaction, student understanding, and cooperation, divided into three periods: the preparation, the remote education period, and the hybrid class period. 【Results】 During the preparation period, all participants felt anxiety about the distance learning, and most were concerned about equipment operation and communication quality. Those who were satisfied with the five-week distance class efforts tended to feel that they were able to handle remote classes well, responding to student requests outside of class hours, and to interact with students. 【Discussion】 It was thought that just initiating the on-demand lectures, rather than using many interactive methods at the beginning of the remote education period, led to anxiety reduction and satisfaction. The mutual

support of faculty and staff leads to an implementation of distance learning with little trouble, which gives a feeling of achievement. At the same time, some faculty felt confused about and difficulties in achieving methods to understand and communicate situations of students.

Keywords: Distance learning, COVID-19, Nursing teachers, Nursing students, quality of education